

所 陵

No. 53

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



ガンダーラ仏像頭部

● 目 次 ●

神が訪れる道 ―奈良市都祁のヤスンバー―	森 隆男	2
体験学習という方法 ―和紙学習館の紙漉き体験学習―	西川 卓志	4
「讃岐の中世寺院」を訪ねて	櫻木 潤	6
インドのマハーラージャー宮殿	上杉 彰紀	8
平成17年度購入資料の紹介 ―朝鮮の陶磁器―	高橋 隆博	10
信州奥霧ヶ峰八島高原	山口 卓也	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

神が訪れる道

——奈良市都祁のヤスンバ——

森 隆 男

1. 神秘的な景観

奈良市都祁白石に広がる水田の中に点々と樹叢が見える。集落の東にそびえる野々神岳の麓に鎮座する雄神神社から、4ヶ所の樹叢が続き、その先には鎮守の森に包まれた国津神社が鎮座している。この樹叢はヤスンバと呼ばれ、地元



写真1 国津神社から野々神岳を望む。間に3ヶ所のヤスンバがみえる。



写真2 国津神社から2番目のヤスンバ

では野々神岳から国津神社に来訪する神が休憩する場所といわれている。水田の所有者は耕作に不便と感じながらも、周囲の草を刈る程度で手を入れることなく守ってきた。

地元の人々が「ののさん」と親しみを込めて呼ぶ野々神岳は、標高550mの雄神山と531mの雌神山より成る。麓の雄神神社には本殿がなく、雄神山を神体としている。三輪神社の奥の院ともいわれ、山頂に磐座が認められるなど古い祭祀形態を伝えている。高台にある雄神神社から約1km離れた国津神社の鎮守の森を眺めるとき、4ヶ所のヤスンバが、1度折れたあと直線的に国津神社に向かっていることに気付く。神は直線的に進むと思われているのだろう。神が訪れる道を視覚的に示すヤスンバが、神秘的な景観を形成している。文化的景観の一つと言ってよからう。

2. 神と人の世界

神が訪れる道と並行して、道が作られている。この道は途中で深江川と交差し、そこに架けられた橋を「伏人橋」と呼ぶ。昔、雄神山で不敬行為をした男がここまで来たとき、雄神山の蛇が先回りをしてここで待ち伏せて、その男を殺したのでこの名があるという。この伝説は深江川が神の世界と人の世界を分ける結界であり、伏人橋がその象徴的な場所であることを示している。神の世界側にある雄神神社は野々神岳に住む神を祭祀する場所であり、人の世界側で川に隣接する3番目のヤスンバは、神を祀る人が禊をした場所であろう。そして国津神社の鎮守の森は、人の世界に神を迎える御旅所とみることができる。国津神社の鎮座地に「神子尻」の地名が残っており、御旅所に関わる宗教者の存在がうかがえる。なお神の世界の側には、現在も人家が少なく、かつては人が住むことはなかったと思われる。集落は人の世界側に広がっている。

3. 野々神岳に住む神とは

野々神岳に住む神とはどのような神であろうか。野々神岳の頂上に洞窟があり、黒い大蛇がすんでいると伝えられている。前出の伝説に登場した蛇は、この山の主であったことになる。また国津神社は「九頭神社」であり、九頭神を蛇神とみる説もある。すなわち野々神岳に住む神は蛇体の神であり、三輪山の大物主神を想起させる。「ののさん」は地域の農民たちに信仰された水の神がすむ世界であるといえる。

4. 人身御供の神話を類推させる神饌

旧暦10月16日（現在は11月3日）に「古祭」が行なわれる。昔は亥の子の日に行なったとの伝承がある。前日に12人の座衆が頭屋に集まって、スコノモチと呼ぶ神饌をつくる。これは3本の竹の脚を交差させ、そこに藁束を取り付けて、さらに餅を置いて台とし、梅と楓、松の枝を挿したものである。奈良県曾爾村の門僕神社でも、秋祭りに「頭甲」と呼ばれる神饌が供えられる。芋の茎を束ねて土台にし、串に挿した餅や柿を挿しこんだもので、頂上に鶏頭を挿して人形状にしている。この神饌には人身御供の伝承が付随している。同様の事例は奈良市西九条の倭神社などにもみられ、国津神社では人身



写真3 人身御供を思わせるスコノモチ

御供の伝承は確認できなかったが、神饌の名称や形態からみて同一の類型とみていいだろう。

この日は、座衆にクルミ餅が振舞われる。この地域には亥の子を「秋じまい」と呼び、クルミ餅を食べる習俗がある。

祭礼の当日は座衆が頭屋に集まり、ダンゴ汁を食べたあと、「頭人子」を中心に国津神社まで渡御をして氏神に神饌を供える。かつては頭人子がなかったという。渡御の際は「チョウサ、チョウサ」と掛け声を出すことが慣例であった。

この儀礼とヤスンバを直接結ぶ資料はないが、前述のように国津神社が御旅所であったとすると、この神饌は野々神岳から来訪する神に供えることになる。すなわち蛇神に人身御供を供える神話の構図が浮び上がる。

5. 位置からみたヤスンバの検討

ヤスンバの起源は不明である。旧都祁村役場に明治22年に作成された「山辺郡白石村実測全図」が残されており、4ヶ所のうち北側すなわち国津神社から3番目までのヤスンバを確認することができる。地目は山林となっている。さてこの3ヶ所のヤスンバは国津神社からみて一直線上に並び、その延長線上、野々神岳に突き当たる1筆に「字野々神」と記されている。本来のヤスンバはこの3ヶ所で、雄神神社の近くにある残り1ヶ所のヤスンバは後に加えられた可能性があるのではなかろうか。

一方、この地域にはヤスンバと同様の樹叢を残す事例があり、たとえば都祁地区小山戸の山口神社では、鳥居から約100m離れた水田の中に10mほどの樹叢が残っており、地元では「森神さん」と呼んでいるという。規模の大小はあるが、奈良県下には各地にこのような森神がみられる。

以上の検討からヤスンバも本来は森神の一例で、そのうちの一直線上に並ぶものが神の来訪するルートを示す聖地として解釈されてきたと考えたい。その前提に野々神岳から神が来訪するという信仰が存在したことはもちろんである。そしてヤスンバが村落空間において明確な秩序を与えていることは重要である。現在ヤスンバは市の指定文化財であり、今後文化遺産として後世に伝えられることになる。多くの謎を秘めたまま。

体験学習という方法

——和紙学習館の紙漉き体験実習——

西 川 卓 志

はじめに

西宮市教育委員会では、西宮市立郷土資料館の分館として「名塩和紙学習館」という施設を運営している。開館は平成元年で、平成14年度以降、より広く一般の方々の利用に供するため、社会教育施設として運営を始め、郷土資料館の分館となった。施設には、名塩紙に関する情報をまとめた常設展示室、和紙を実際に漉くことができる実習室などを備える。



西宮市立郷土資料館分館名塩和紙学習館

1. 名塩紙とは

「名塩紙」とは、西宮市名塩1、2丁目で漉かれる和紙の総称で、その起源は少なくとも江戸初期まではさかのぼる。原料・抄紙法・填料に特徴があり、独特の和紙を製造する。原料には雁皮だけを用い、填料には地元産の泥、シャナにはノリウツギを発酵させたネリを用いる。雁皮は、江戸期には雁皮問屋がその需要を担ったが、原則的には地元中国山地に自生するものを用いる。「泥」とは、凝灰岩の2次堆積層を採取し水を混ぜて磨りつぶした上澄み液のことで、雁皮と混合して使用する。この泥の含有率を自在に変え、間似合紙、鳥子紙、箔打紙等、多岐にわたる用途に適った紙を抄造する。農間余業ではなく本業として抄紙業を行ってきたため男女間の分業が進み、原料の調製や紙干しは女性が、抄紙作業は男性が船（木槽）の前で跣

坐して行い、古式といわれる「溜め漉き」を今も守る。このようにして生まれる純雁皮の紙は、洗練された光沢があり、泥をより多く含んだ紙には湿気を帯びたかのような滑らかさがある。泥を多く含有することに起源する利点として、日に焼けない、虫が付かない等があり、屏風や銀箔の下張り、各種美術用紙に利用されるとともに、金銀箔を挟んで圧延する圧延紙としての完成度は随一で、永く金銀箔の生産を担ってきた。

昭和58年に名塩紙技術保存会を保持団体として兵庫県指定重要無形文化財に、平成14年に谷野武信氏を保持者として国指定重要無形文化財「名塩雁皮紙」に指定された。

2. 学習館の運営と工夫

和紙学習館は和紙に関する専門館で、名塩紙の歴史を紹介するとともに、実習により和紙抄造のメカニズムを体験的に学ぶ機会を提供する施設である。館の運営を支えるものが2つある。まず、運営組織である。運営のソフト面は、地元の「西宮市立郷土資料館分館名塩和紙学習館紙すき推進委員会」が主体となる。そのメンバーは、抄紙業の経験者、市立名塩小学校関係者、関連事業者等からなり、学習館職員が補佐する。前述の通り和紙専門館ということから、原料の調達、抄紙技術のインストラクティング等、地元の抄紙経験者やその関係者の協力が欠かせない。また、実際の実習中に、ステンレス製の船（槽）に原材料を準備したり、実習者に目を配り実習を援助したり、終了後のあとかたづけを行う、事前に研修を受けた補助員がサポートする。このように、本来の「名塩紙」の生産を支えてきた組織をうまく現代的にアレンジして「紙すき推進委員会」は作られ、市立名塩小学校特別教室であった時代から学習館のソフト面を受け持ち、それは社会教育施設となった平成14年度以降も引き継がれている。

次に、なんと言っても、用具等の工夫があげ

られる。用具の中でも直接紙の出来映えを左右する簀桁の工夫が出色である。今でこそ大型クラフト・ショップへ行けば「紙漉きセット」として一式手に入るが、本館の簀桁は長時間の試行錯誤が形に表れており、ひじょうに興味深い。本来の名塩紙は非常に特殊な桁と簀を用いることで知られている。抄紙法が「溜め漉き」のためと思われる。簀を上下から挟む桁は、吊り紐等で支持せず腕力頼みで紙料の重さに絶える。そのため、上桁、下桁の区別はあるものの、構造は極めて単純である。一方、簀は複雑である。一般的な楮紙抄造用と比較して粗めである。篠竹をさいたものを粗く膝った竹簀に、編み目の異なる帛（きぬ：麻布を柿渋に浸して乾かしたもの）を複数枚重ねて糸で膝って簀に取り付け、竹簀と一体になって機能させる。これを駆使して漉手は仕事を行うが、実習を希望する素人には、このような特殊な用具を操ることは困難である。そのままでは、「自分が漉いた紙」という実習の成果を持って帰れない。そこで、和紙学習館では、まず“和紙”ができていく原理を学んでもらうという視点に立ち、確実に製品にできる方法をとる。原料には、パルプ、楮、雁皮を混合したものを使用し、参加者によって扱いやすい割合に調製する。未経験者がその習熟度に応じて挑戦できるように、桁のサイズにもはがき大から美濃判まであり、名刺抄造用の桁もある。ここで使用する桁は、扱いやすいように簀・帛と一体化しており、銅製の金網が本来の簀と帛の代役を果たす。金網は桁に緊結され、網面が波打たないように固定されている。しかも、密度の異なる網を複数枚重ねて使われる。桁（木枠）のシンプルさと、密度の異なる金網を組み合わせて使用する点は、本来の名塩紙の用具に共通する。初心者でも抄紙作業の原理を学びながらも“紙”の形になり、また練習を重ねれば上質の紙になる。そのような実習用の原料と用具が、本来の名塩紙を踏まえて考案されている。地元の小学生は早くより授業の一環として抄紙に取り組み、その集大成として卒業証書を自作し、卒業式では自分製の卒業証書を受け取る。

3. 体験学習という方法

和紙学習館の体験学習は、学習性を重視する

点に特徴がある。とはいえ、和紙総論を詰め込もうとするものではない。和紙にまつわる技術、和紙のできる原理やその面白さ、困難さを知ってもらい、名塩紙という特殊な抄紙法を維持して生産される紙へと思いを巡らせてもらうことを重視する。当然、“観光紙漉き”とは一線を画する。紙を知ることから、名塩紙をより理解する入口に立つことをめざす。しかし一方、うまく調製された原料を使う限り、実習者は本来の名塩紙を漉くことはできない。

そこで、近年「本格紙漉きに挑戦」という成人向け講座を開講している。“純雁皮泥入り紙”を漉く試みで、「チリヨリ」「ミズヨリ」「煮熟」「叩解」といった原料の調製作業はもちろん、抄紙をし終えた製品の水を絞り、銀杏の一枚板を使った干板に刷きつけて乾燥後それをはずすまでを、4日間連続で行う。時期は本来の抄紙作業が佳境に入る真冬である。前述の推進委員会メンバーの八木米太郎氏（抄紙技術経験者）がつきっきりで指導に当たるが、原料の調製段階で本来は除去されるべき雁皮の“あま皮”が残り、製品はかすかに緑色を帯びる。除去しきれない表皮の残片や参加者が身につけている冬物セーターの繊維片も入り込む。味のある紙にはなるが名塩紙の製品にはほど遠いらしい。参加者は、雁皮のねばり、汲みこんだ後の水抜きの悪さに悪戦苦闘しながらも、より大きなサイズ、透かしの漉き込みと、意欲を見せる。

4. まとめ

博物館でさかんに体験学習が導入されるようになって久しい。最初は「土器作り」や「火おこし」がほとんどであったが、現在では、より専門的であったり、大規模であったりと色々な取り組みが行われている。ここでは、西宮市の和紙学習館の様子を紹介し、体験学習について若干の意見を述べた。単発形式の楽しいイベントとしての“〇〇体験”を否定するつもりはないが、博物館で実施する体験型の事業としては、学習するという姿勢に固執することも重要ではないかと思い、その内容とそれを支えているソフト・ハード面を紹介した。

長々と述べてきたが、これらの活動を可能にしているのは地元関係機関や個人のご協力の賜物である。最後にお礼を申し上げたい。

「讃岐の中世寺院」を訪ねて

櫻 木 潤

毎年、夏が終わる頃、「日本宗教史懇話会サマーセミナー」が開催される。今年の開催地は香川県。サマーセミナーの三日目には、「讃岐の中世寺院」と題した見学会があり、善通寺など、讃岐のいくつかの寺院を訪ねた。筆者は、御霊信仰を研究テーマとし、最近では空海伝の研究にも取りくんでいるため、今回の見学地は魅力的であった。そのうち印象に残った二、三の寺院について紹介したい。

崇徳上皇鎮魂の寺—白峯寺—

白峯寺は、香川県坂出市にあり、五色台のひとつ白峰山の頂にあって、瀬戸大橋を見下ろす風光明媚な場所である。寺伝では、空海が創建し、円珍が再興したとする。元々は五色台を斗薨する修行者たちの山林道場であつたらしい。七棟門をくぐって左手に進むと、「頓證寺」の扁額がかかる勅額門があり、その奥に崇徳上皇の霊廟である頓證寺殿がある。崇徳上皇は、保元の乱で讃岐に流罪となり、当地で亡くなった。勅額門を右に折れ、しばらく歩くと崇徳上皇の白峯陵がある。

崇徳上皇は、怨霊伝承でも有名な人物である。『保元物語』によれば、仁安三年（1168）に西行が白峯陵に詣で、「よしや君むかしの玉の床とても、かからんのちは何にかはせん」との歌を奉ったところ怨霊が鎮まったという。また、白峯寺への参道には、鎌倉時代末期の銘文をもつ二基の十三重石塔が立っているが、その位置は、白峯陵から谷ひとつ隔ててほぼ正面にあたっている。二基の石塔も、崇徳上皇の霊を鎮魂しているかのようなたたずまいであった。

空海誕生の地—善通寺—

善通寺は、香川県の西部にあたる善通寺市善通寺町に所在し、「屏風浦五岳山誕生院善通寺」と号する。真言宗善通寺派の大本山である。寺伝によれば、大同二年（807）に着工し、弘仁四年（813）に落慶したとされる。

善通寺の境内は、大きく二つに分けられる。

五重塔・金堂がある東院と、空海をまつる御影堂のある西院である。西院は、誕生院とも呼ばれ、空海誕生の地とされる。空海は宝亀五年（774）に讃岐国多度郡屏風浦で誕生したとされ、その地がこの善通寺であったという。



西院（誕生院）の中心である空海をまつる御影堂

松原弘宣氏は、多度郡内に、前善通寺址と仲村廃寺の二ヶ所の奈良時代の寺院址があり、いずれも法隆寺式の瓦を出土している。法隆寺は、庄倉を計46ヶ所保有しており、そのうち伊予・讃岐には27ヶ所存在することから、法隆寺と伊予・讃岐が深い関係にあったとする。仲村廃寺は、忍冬唐草文の軒平瓦と複弁八葉蓮華文の軒丸瓦がセットで出土しているため、その建立は七世紀後半とみられるが、前善通寺址については、仲村廃寺と直線にして700メートル程度しか離れていないことや、前善通寺出土とされる瓦の出土地点や出土状況が不明であることから、その建立は仲村廃寺よりも下るとし、善通寺は、空海が満濃池を修造した前後（弘仁十二年〔821〕ごろ）に空海の父田公系列の佐伯直氏によって建立されたとみるべきであると結論づけている¹⁾。

善通寺の名が史料上初めて登場するのは、寛仁二年（1018）五月十三日付け「善通寺司解」である（『平安遺文』古文書編、第2巻、481）。紙幅の都合上、全文を掲げることにはできないが、その内容は、善通寺の領田や免田からの収入は

わずかであり、「寺家例用」・「破壊修理料」がともに大いに不足していることを東寺に訴えたものである。「破壊修理料」がみえることから、当時の善通寺がすでに修理を要するほどの状態であったことが想像できる。したがって、史料上の初見は、11世紀初頭の寛仁二年であるが、善通寺の創建は、それより以前に遡れることは間違いない。しかし、それが、松原氏が想定したように弘仁十二年ごろかどうかは、今後の課題とすべきであろう。

善通寺をめぐるのは、先の「善通寺司解」に、「法花三昧・六時念仏・読経之勤、尤盛也」とあることから、寛仁二年当時の善通寺が、弘法大師建立の寺との由緒をもち、「大師御霊」の効験・功德を強調しながら、年中行事として、不断念仏や法華八講などの天台宗的な色彩の強い法会を特徴とする道場であったとの山陰加春夫氏による指摘がある²⁾。また、武内孝善氏は、これまで善通寺とされてきた空海の誕生地について、空海の母方である阿刀氏の一族が讃岐に居住していた形跡がなく、当時の婚姻形態では母子は母方の一族と生活をとともにすると考えられることから、空海の誕生地は、讃岐の善通寺ではなく、阿刀氏が居住する畿内であるとする説を発表している³⁾。いずれの説も、われわれがこれまで持っていた常識を覆すようなものであり、今後、検討しなければならない。

善通寺の創建や、この地方の宗教的風土は、空海の幼少期や壮年期の活動を考える上で、重要な問題である。空海伝研究のテーマとして、今後取りくんでみたい課題である。今回の旅の大きな成果であった。



東院にはお遍路さんや参拝客が後を絶たない

鑑真開基伝承をもつ寺—鷺峰寺—

讃岐平野には、テーブル状のユニークな山がいくつも隆起しているが、このうちのひとつの山容がインドの霊鷲山に似ているとし、天平勝宝六年（754）に鑑真が釈迦如来像を刻み、堂宇を建立したとされるのが、鷺峰寺である。鎌倉時代末期には、大和西大寺の末寺となっている。収蔵庫には、国の重要文化財に指定されている鎌倉時代の作になる木造四天王立像四躯が収められており、間近にその尊容を拝観することができたが、迫力のあるものであった。これらは、嘉元四年（1306）、大和西大寺長老の慈心和尚が六十余の僧侶を率いて大供養を修した頃に安置されたとされている。

鷺峰寺のほか、屋島寺など讃岐平野にある寺院には、鑑真を開基とする伝承をもつものが多い。中世の西大寺流律宗の活動の影響も考えられるが、興味深い伝承である。

今回、「讃岐の中世寺院」として上記の三寺院のほか、空海が唐から帰国後に建立したとされる曼荼羅寺や、讃岐国分寺などを訪ねたが、いずれも古代から法灯を受け継ぐ寺院である。讃岐平野は、空海のほか、円珍を輩出した地であり、平安仏教にとっての母なる地である。しかし、空海誕生の地として有名な善通寺をはじめ讃岐の寺院には、まだまだ研究すべき課題が残されている。今回の旅でも、現地に足を踏み入れてこそ知ることができる発見があり、現地踏査の大切さを実感した。

【註】

- 1) 松原弘宣「讃岐国西部地域における地方豪族—空海と円珍の一族を中心にして—」（同氏『古代の地方豪族』、吉川弘文館、1988年）。
- 2) 山陰加春夫「中世『寺院縁起』の案出と「新史実」化—讃岐国善通寺の場合—」（同氏『中世寺院と「悪党」』、清文堂出版、2006年、初出は1999年）。
- 3) 武内孝善「空海の誕生地」（同氏『弘法大師空海の研究』、吉川弘文館、2006年）。

インドのマハーラージャー宮殿

上 杉 彰 紀

インドといえば、仏教寺院やタージ・マハルを思い起こされる方が多いかもしれないが、そのほかにも日本ではほとんど紹介されないことのない優れた歴史遺産が数多く現存している。今回紹介するマハーラージャーの宮殿もそのうちの一つである。

マハーラージャーとはヒンディー語で「大王」の意味で、古代より支配者の称号として用いられてきた。中世の時代にはヒンドゥー教を奉じる権力者たちがインド各地に勢力を競い、13世紀以降は西方から侵入したムスリム（イスラム教を奉じる人々）勢力と時に抗争を繰り返し、時にその宗主権下に組み込まれながら、地方君主として勢力を維持してきた。

北インドから中央インドにかけての地域において歴史的に重要な役割を果たしたのは、ラージプートと呼ばれる社会集団である。彼らは中央アジアから移住した遊牧騎馬民族の末裔ともいわれるが、8世紀までにはインドのヒンドゥー社会の中に組み込まれ、戦士集団として北インド、中央インドの各地に王朝を築いてきた。12世紀末以降にはムスリム勢力と抗争を繰り返したが、16世紀には南アジアのムスリム王朝の中で最大の勢力を誇ったムガル朝の支配体制の中に組み込まれ、19世紀後半にはイギリス・インド帝国の宗主権下に置かれることとなった。1947年のインド独立以降、彼らの王国は解体されたが、いまなおマハーラージャーの末裔たちが地域社会の名主として存在している場合が多い。

ラージャスタン地方は、そうしたラージプート勢力が活躍してきた中心的地域であり、彼らの歴史にまつわる史跡が数多く残されている。とりわけ、彼らの都が置かれたところには宮殿が現存し、かつてのマハーラージャーたちの栄華を伝えている。現在もラージャスタン地方の主要都市となっているジャイプルやウダイプル、ジョードプルなどの宮殿はつとに有名で、内部が整備され公開されているこれらの宮殿にはインド国内外から多くの観光客が訪れている。こうした代表的な宮殿のほかにも、ラー

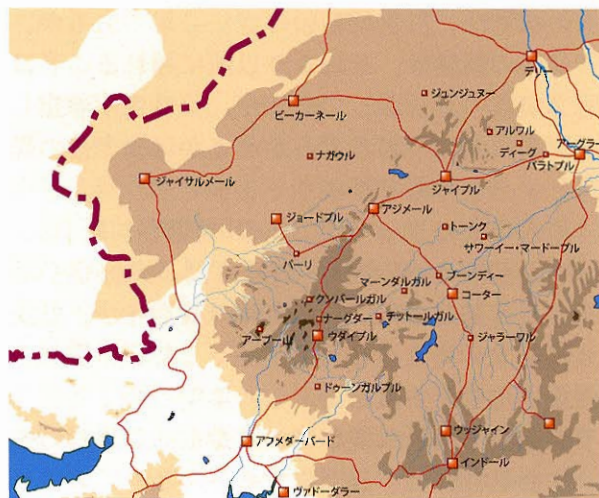


図1 ラージャスタン地方の地図



写真1 チットールガル城

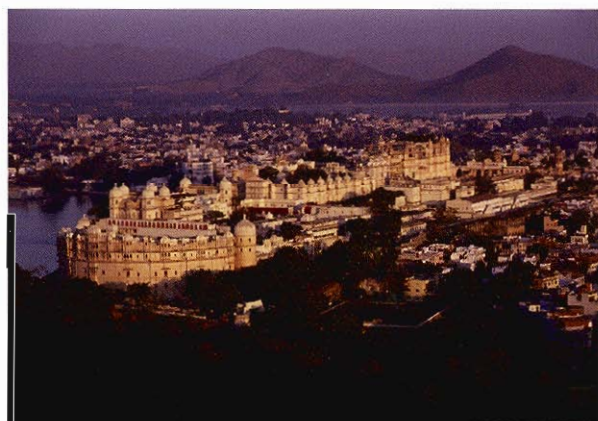


写真2 ウダイプルの宮殿

ジャスタン地方には大小数多くの宮殿が分布しているが、中には廃墟と化してかろうじてかつての姿をとどめているものもある。

ラージプートの戦いの歴史を反映するかのよ

うに、彼らの宮殿は防御施設をともなつて山上に築かれている場合が多い。ラージャスターン南部にあるチットールガル城がその代表で、南北に延びる細長い独立丘陵の頂上に堅固な城壁をめぐらせ、その内部に宮殿や大臣たちの邸宅、寺院などを残す。このチットールガル城はラージプート勢力とムスリム勢力の激戦の地として歴史の中にその名をとどめている。

外部の者を受けつけない堅牢な外観とは対照的に、マハーラージャーが住まう内部は豪華絢爛である。宮殿内部は男性と女性の区画に分けられ、謁見の間やマハーラージャーの個人的な空間、食堂、寝室などさまざまな施設が設けられている。室内装飾には彫塑、鏡、ミラーボールなど多様な手法が用いられているが、最も好まれたのは壁画装飾である。ラージプート美術の代表として、マハーラージャーの宮廷生活の場面やヒンドゥー教の神々を題材とする細密画（ミニアチュール）がよく知られているが、宮殿建築の内部装飾として同様の題材が室内の壁面に描かれた例がある。

その代表例はラージャスターン南部のハルドーイ地方にあるブーンディーの宮殿である。ブーンディーは中世都市の佇まいを残す地方都市で、日本人はほとんど訪れることがないが、ヨーロッパ人には人気のあるところである。

宮殿は町の北側に広がる山塊の斜面を利用して築かれている。現在、マハーラージャー一族の末裔は平地に築かれた新宮殿に住んでおり、旧宮殿は長く打ち捨てられていたが、最近その残りのよい一部が一般に公開されている。その中に壁面全体に細密画を描く小部屋がある。紙に描かれた細密画と同様に、マハーラージャーの生活の場面やシヴァ神などのヒンドゥー教の神々を描くが、四周の壁面から天井に及んで濃密に描き込まれた細密画は、細密画が本来もっていた「場」との関係性を物語っている。

細密画も含めて、ラージプート美術とイスラーム美術の関係はよく知られているが、宮殿建築の各所にもその関係を窺うことができる。また、イギリスによる植民地化の時代には、ヨーロッパ文化とラージプート文化の交流も行なわれるようになった。宮殿建築の中にはヨーロッパ人の建築家が設計に当たった例も知られ、インド建築とヨーロッパ建築を融合させた建築様式が生み出

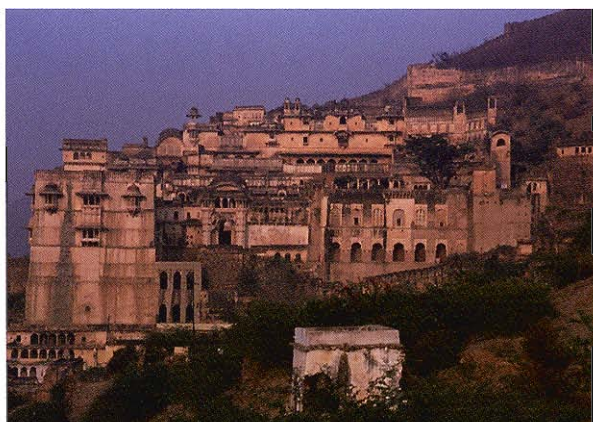


写真3 ブーンディー城

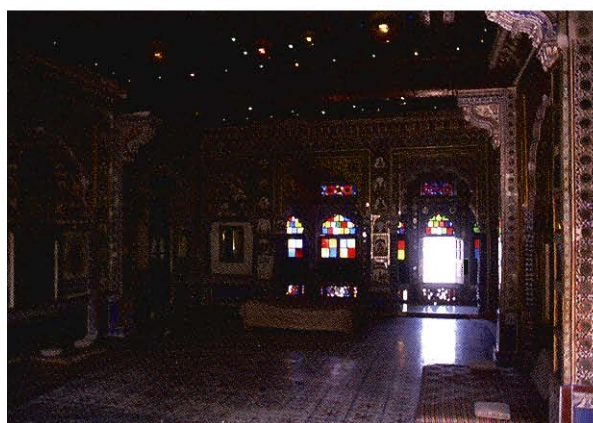


写真4 ジョードプル メヘラーンガル城 内部

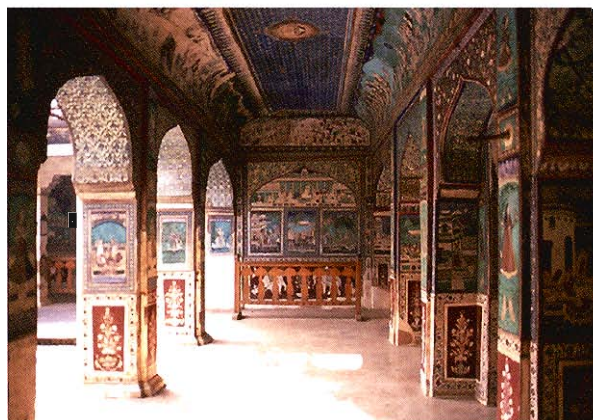


写真5 ブーンディー城 内部

されることとなった。またマハーラージャー一族の所有品の中には、ヨーロッパ絵画やヨーロッパ陶磁器のほか、伊万里焼や薩摩焼などの日本産陶磁器も数多く含まれており、19世紀後半の国際社会の一端にインドが組み込まれていたことを物を通して改めて知ることができる。

現存するマハーラージャー宮殿には、ヒンドゥー、イスラーム、ヨーロッパというさまざまな文化伝統が南アジアの歴史を背景として埋め込まれているのである。

平成17年度購入資料の紹介

——朝鮮の陶磁器——

高橋 隆 博

博物館にとって、いつも念頭におかなければならない課題のひとつに、館蔵品の充実がある。とはいっても、大学博物館は、一般の方がたからの寄贈、あるいは寄託といった機会がきわめて少ない。そして、購入についても、もとより潤沢な資金が用意されているわけではない。そのため、どの分野の資料を、どのように系統的に収集すべきか、いつもながら心を砕いている。

平成13年度からは、不十分ながらも漢時代から明時代までの中国の陶磁器資料15点を収集してきた。これらは、すでに平成15年度の『博物館開館10周年記念 名品展』をはじめとし、平常陳列にても公開してきた。今年度は、朝鮮の陶磁器を6点購入した。周知のように、当館は新羅土器や伽耶土器、あるいは絵高麗や粉青沙器など、いくつかの朝鮮の陶磁器を収蔵しており、これのさらなる充実をはかるための購入であった。

韓国では、図書館と博物館を設置することが、大学の設置基準とされているために、ソウル大学をはじめとし、高麗・延世・梨花女子大学など、いずれの大学も立派な博物館を有している。慶尚北道大邱市の名門校として知られる慶北大学の野外陳列場には、石仏や石造品などが、芝生をしきつめた美しい景観を誇る小高い丘のそこかしこに惜しげもなく並べられている。この点、日本の大学博物館は、大いに韓国の大学博物館に見習うべきであろう。

灰釉梅瓶

(高麗前期 高32センチ 胴径18.5センチ)

口縁部が細くて立ち上がりが高く、肩部が豊かに張り、脚部がすぼまった姿形の瓶を梅瓶とよんでいる。この名称の由来は中国にあって、中国では口径が小さいものを「梅の瘦骨」と呼ぶところから名づけられたといわれている。中国では、宋代の青白磁器に多くみられ、宋代以後も踏襲され、朝鮮半島では、高麗時代の青磁や朝鮮時代の三島手にしばしば見られる器形で

ある。

朝鮮半島では、三国時代(高句麗・新羅・百濟)の四世紀ごろから、傾斜地に細長い穴窯を築き、硬く焼き締まった陶器を焼成するようになる。この技術は日本に伝わって、日本の須恵器の生みの親となった。傾斜のある窯は、いわゆる「火の引き」がよいために比較的容易に高い火度を得ることができ、しかも次つぎと薪を投入することによって「還元」の状態で器を焼き締めることになる。本作例は、焼き締めによるものだが、器形はすでに統一新羅時代のそれではないが、この梅瓶を覆う自然灰釉(青磁釉薬の祖型。窯の中で灰が降りかかり、素地の中の珪石分を溶解し、器の表面に一種のガラスをつくり出す)は、やがて全盛を迎える高麗青磁の出現を暗示している。したがって、この梅瓶は高麗時代ごく初期の作例といえよう。



粉青印花文茶碗

(李朝前期 高7.5センチ 径18.3センチ)

茶碗の見込みに二つの界線をめぐらし、中央の界線内にはいくつかの菊花文をあらわし、その周囲に剣菱文をめぐらし、さらにその外側には鎬文を配している。技法的には、鼠色の胎土をもちいてロクロで成形し、半乾きの素地に菊花文や剣菱文の型を押しつけて印文をほどこしたのちに白土で化粧掛けをほどこし、さらにこれを拭き取ると、まるで印文の凹部に白土を象嵌したような表現となる。これに透明の釉薬をかけて焼成するのである。こうした焼き物を日本では俗に三島手といい、現在朝鮮では粉青沙器（粉装灰青沙器の略）とよび、おもに15～16世紀にかけて、現在の韓国南部でつくられた。朝鮮時代には、高麗青磁の技術が衰えをみせるが、その象嵌技法の名残りといえる。

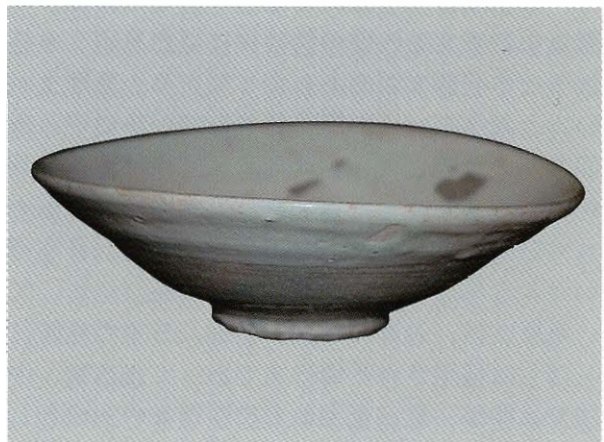
三島手の名称は何に由来するのか、はっきりしない。地文様となっている鎬の波形文や印花

の象嵌文様が、三島暦の文字に似ているところからついた名称というのが通説とされている。三島暦とは、伊豆国の三島明神社が応仁・文明のころ、伊豆と相模の両国に限って頒布した仮名の細字書きの暦のことである。ちなみに『茶道正伝集』は、「茶碗に昔伊豆三島より出せる三島暦に似たるを文様あるをもって之を三島といひ、又暦手ともいふ」と記している。

刷毛目平茶碗

(李朝前期 高5.7センチ 径18.5センチ)

浅く平たい形をした茶碗。灰鼠色を呈する胎土でつくった茶碗に白い泥釉を厚くぼつてりと掛けているが、あまりに白泥が厚かったためか、乾燥している間に白泥が飛んでしまっている個所がみられる。こうした形の茶碗は、日本の茶席では、夏茶碗として夏期に好んでつかわれる。刷毛目とは、稲わらの芯にあたるミゴでつくっ



た硬い刷毛で白い化粧土を器に塗る技法のことをいう。刷毛で一気に化粧土を塗るために、濃淡、あるいはかすれた部分が生じるのだが、日本の茶人たちは、それを一つの「景色」「風趣」として鑑賞してきた。

茶碗の見込みには、重ね焼きした際の目跡が六つ、高台にも六つ残っており、特に見込みの目跡は景色となっている。刷毛目は、粉引（化粧掛けの白泥釉がまるで粉を引いたようにも見えるところから付いた名称。粉吹ともいう）や三島手と同じ系統の技法に属するが、三島手がより簡略化されたものである。こうした三島手や刷毛目、粉引系の焼き物は、おもに韓国の慶尚南道で焼成された。

白磁青花鳳凰文壺

（李朝後期 高23.5センチ 胴径19センチ）

本作例にみられるような、肩を大きく張り、胴から裾にかけてすばまるプロポーションの壺は、李朝磁器に特徴的な器形である。胴部には鳳凰文と雲文を、首の付け根には如意頭文を連続させる装飾文帯をあらわしている。鳳凰文といい、雲文といい、簡略化されているので、李朝後期の焼成とみなされよう。文様はすべて酸化コバルトを含んだ青色を発色する顔料で描かれている。青花とは、中国名であって、日本ではいうところの染付にあたる。

鳳凰文は、おもに中国、朝鮮、日本の意匠にしばしば採用される瑞祥文であって、古来、中国では麒麟、亀、竜とともに四瑞祥の一つとし



て尊ばれてきた想像上の瑞鳥である。その形姿は、前は麒麟、後ろは鹿、尾は魚、背は亀、顎は鶏に似ているといわれ、梧桐に棲み、竹の実を食し、醴泉を飲し、聖徳の天子（大変すぐれた天子の意）が現れる時に限って、その予兆として、この世に姿を見せる瑞鳥とされ、九万里の青天を飛翔し、その姿は万人の目にはとまらないとされている。

白磁青花菊枝文壺

（李朝後期 高19.5センチ 胴径20センチ）

白い釉肌に染付けで大ぶりの菊枝文と蝶とを胴部全体にあらわした丸い壺。文様を線描した中に、濃（だみ）といって、太い筆でごく薄い



呉須の溶液で広い面をむらなく塗りつぶしている
るので、陰影がくっきりと表現されることになり、
そのため菊枝文に立体感と写実性を与える
効果を発揮している。とはいっても、文様の粗
雑感はいなめず、その焼成時期は李朝後期まで
降る作例といえる。

陶磁器に限らず、朝鮮美術が採用するもつと
も多い意匠に四君子がある。四君子は、菊・梅・
竹・蘭の四つで、これらはそれぞれ君子たる気
品を備えていることをあらわしたもので、君子
の気品とは、「君子の三樂」すなわち「父母兄
弟が無事であること」「天地に恥じることのな
いこと」「天下の英才を育むこと」にある。こう
した君子の実直な気風が、李朝の儒教に適応し、
その象徴である四君子が尊ばれたのであろう。

なお、菊花文は、朝鮮半島では高麗時代中期
ごろから流行し、工芸意匠の主流となる。しか
しなんとといっても、菊花の気質はその辛抱づよ
さにある。菊以外の花が散る秋に花を咲かせ、
しかも厳しい霜が降りても花を散らさないところ
から、君子の聖徳・義理・忍耐の象徴とされ、
四君子の一つになったと考えられる。

白磁餅型

(高5.5センチ 径18.7センチ)

餅菓子などに押しつけ文様を型押しする道具
で、木製の型もみられるが、焼き物が圧倒的に
多い。餅菓子文となる見込みの陽刻文は、中央
に大きな菊花を置き、その四方に半菊花の覗き
花文と枝葉文のそれぞれ二つをあらわしている。
餅型だけでなく、李朝の陶磁器には、たと
えば酒注や盃などの飲食具、水滴や筆筒などの
文房具、さらには祭器鉢から油壺、はてはおろ
し板にいたるまで、じつに多種多彩にわたり、
しかも愛すべき小品がじつに多い。のみならず、
蛙とか鳥、桃を、あるいは獅子を、さらには牛
にまたがって笛を吹く童子を象るものから、お
どけた表情の虎を染め付けで描くなど、多岐に
およんでいる。こうした作品には、李朝人の豊
かな美意識と無垢な心情が、自然に表出されて
いるとみなければならぬ。

ところで、李朝の白磁の色調について、これ
まで日本人は、朝鮮民族のおだやかな気風が白
色嗜好を招いてきたとか、この国の悲劇の歴史

と重ね合わせて、悲哀の色とみなしてきたが、
こうした考え方はまったくの誤りで、たとえば
『五州衍文長箋散稿』に「わが国の磁器は潔白
なるを以て其の長点とす」とする故事が紹介さ
れており、いかに白色が高貴な色をあらわして
いるか、貴ばれてきたかをうかがうことができ
よう。



信州奥霧ヶ峰八島高原

山口 卓也

はじめに

信州の八ヶ岳中信高原国定公園をぬって走るビーナスラインは、信州を代表する観光道路で、蓼科から白樺湖、霧ヶ峰から八島高原、美ヶ原まで縦貫している。眺望のよい高原のドライブウエイであるが、南から霧ヶ峰高原まで北上してきたビーナスラインが奥霧ヶ峰八島高原に差ししかかるところに、大きく湾曲迂回している部分がある。目前の高原からそれていくのは、なぜだろうか。

奥霧峰八島高原

長野県諏訪郡下諏訪町の奥霧ヶ峰八島高原は、八ヶ岳中信高原国定公園に属し、標高1,620mの八島ヶ原高層湿原を中心にして鷲ヶ峰、丸山、大笹峰、蝶々深山に囲まれた一帯からなる。草原化した高原の初夏から初秋、高山植物がいっせいに咲き乱れる時期は有名で、多くの観光客が中央道からビーナスラインを利用して訪れている。また、森林環境の熊や鹿を見かけたり、草原環境に適した中小野生動物の活発な活動を観察することもできる。

高原の中央にある八島ヶ原高層湿原は、最終氷期終末から形成されたもので、ミズゴケを主とする200種類以上の植物が、枯れても腐植土とならずに堆積して泥炭化し、植物でおおわれた表面が上へ上へと生長して全体が水面よりも高く盛り上がったものである。高層湿原の南限

で、標高の高いこと、泥炭層が8 mにおよぶことから国の天然記念物に指定されている。

この八島高原の周辺には、和田峠周辺、星ヶ塔黒曜石から信和町鷹山、星糞など黒曜石原産地があり、周辺に旧石器時代から縄文時代の黒曜石原産地遺跡が点在し、中部高地や関東地方への石器石材供給が行われていた。また高原自体も旧石器時代から縄文時代の生活空間であったらしく、八島ヶ原高層湿原のビーナスライン側入り口には黒曜石製の尖頭器を出土した八島遺跡があり、高原内で今もしばしば黒曜石製石器が表面採集されるという。

鎌倉時代には、諏訪神社下社の狩猟神事が行われた祭祀場で、流鏑馬が行われた旧御射山遺跡が湿原の南に残されている。扇形に広がった窪地の周辺は植林と草原であるが、よく観察すると桟敷席のテラス状造成痕が観察できる。発掘調査では、神事や奉納射技などに使用された遺物、古銭・鉄鏃や諏訪神社の神器由来の「薙鎌」ほか、大量のカワラケ（素焼の皿）などが出土している。また、諏訪神社の御柱の切り出しは、八島高原の西側溪谷から行われることも知られる。

ビーナスライン

このように高原と高層湿原を生み出すような環境が、早くから人の活動領域に組み込まれて



写真1 八島ヶ原湿原



写真2 旧御射山遺跡



写真3 熊の爪痕

いたことがわかる。一見人間活動に乏しそうに思える高原内にも、その痕跡を豊富に見いだすことができるが、信州では郷土史研究の伝統と教育者の高い学術啓蒙意欲、郷土意識の高揚により、早くから注目されていた。

1961年に建設着工したビーナスラインは、1968年に霧ヶ峰～和田峠間の建設に当たって、この旧御射山遺跡の保存と八島ヶ原高層湿原植物群落の保護を求める反対運動があり、大規模な署名活動などによって旧御射山遺跡から湿原を直進する計画ルートが変更されたことで知られている。ビーナスラインの湾曲迂回は、その変更の結果である。

この国内でも先駆的な自然保護の住民運動を題材に、新田次郎は小説「霧の子孫たち」を書き上げたことは有名である。その後、美ヶ原への延長反対運動があったが、1981年に全線開通している。2002年2月には全線無料化された。

霧ヶ峰高原から奥霧ヶ峰八島高原のビーナスラインの変更によって、八島高原の中心環境はとりあえず保全されたが、それ以後もビーナスラインの過剰な交通量やハイカーの環境負荷、高原での経済活動によって少しずつ変異しており、ビーナスラインと高原領域の環境への影響調査と利用方法への公開審議は、今も続けられている。

高原のとりくみ

このような中、八島高原にある下諏訪町立ビジターセンターを中心として、この八島高原と

八島ヶ原高層湿原の自然環境とその特徴、歴史的な変遷を、インタープリター（自然解説員）がビジター（見学者）に説明する（インタープリット）ガイドウォークや自然観察会が行われている。

また KiNOA などの NGO は、活動の拠点を高原にもち、長期にわたる環境データの蓄積、インタープリターとなつてのビジターとのコンタクト、行政や学会へのデータ提供などを試みている。この中で、牧草地の維持が不可能となった周辺地は、次第に森林回復し、環境の保水力に変動が生じたこと、湿原の植生の変化が把握された。この長期変動の予測が可能であることが知られ、自発的な環境モニターとしての役割を果たしている。



写真4 インタープリターとビジター

議論好きな風土を持つ信州の地にあつて、自然や文化財保護の仕組みの中に、このような一体的な認識を持った取り組みがあることは、とくく利害の衝突する地域や業界間の調整作業を円滑にし、よりよい合意を生み出す基盤となると思う。

KiNOA 事務局

〒393-0000 長野県諏訪郡下諏訪町八島湿原 10618

鷲が峰ひゅって内 Phone Fax 0266-58-8088

<http://www.nature2.jp/kinoa/index.html>

下諏訪町立八島湿原ビジターセンター

〒393-0000 長野県諏訪郡下諏訪町八島湿原 Phone 0266-52-7000

<http://blog.goo.ne.jp/vc527000>

■ 博物館だより

◇平成 18 年 4 月 24 日に、関西大学創立 120 周年記念事業の一環として、なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟竣工記念特別展「インカへの道—アンデスの秘宝—」のオープニングセレモニーを開催いたしました。本展は、関西大学の教育と研究に格別のご理解を示された篤志家から古代アンデスの美術作品が寄託され、これを受けて特別に公開したものです。5 月 21 日までの 21 日間という短い会期にもかかわらず 3460 人の方々にご観覧いただくことができました。

◇平成 18 年度ミュージアム講座の開催

平成 2 年度から事業局（平成 17 年度には事業課からエクステンション・リードセンター事務室へ業務を引き継いで実施）と博物館の共催で開催してまいりました「考古学入門講座」は平成 17 年度をもって終了し、本年度から新たに「関西大学ミュージアム講座」と銘打って開催することになりました。7 月 10 日（月）から 12 日（水）の連続 3 日間、総合テーマを「なにわの文化遺産」として、のべ 294 名の受講者がありました。

7 月 10 日「行基と難波津」関西大学文学部教授 西本 昌弘

7 月 11 日「大阪城の歴史と謎・伝説」大阪城天守閣研究副主幹 北川 央

7 月 12 日「天神祭の歴史とみどころ」大阪天満宮文化研究所研究員 近江 晴子

◇平成 18 年度博物館なんでも相談会の実施

8 月 4 日（金）と 5 日（土）の 2 日間に、今年度で第 4 回となる「なんでも相談会」を実施しました。今年は博物館を会場に「キャンパス昆虫探検隊」「作ってみよう！葉っぱのバッタ」「勾玉作り」「銅鐸スケッチ」など体験を重視したイベントを行いました。事前申込制とした「勾玉作り」と「銅鐸スケッチ」には、2 日間でそれぞれ 89 人と 14 人の参加がありました。また、当日受付した昆虫探検隊には 148 人が参加、106 人がシュロの葉っぱでバッタとかたつむりを作りました。史・資料については 6 組の方から相談がありました。



・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

肝陵第 53 号をお届けいたします。森隆男教授、西川卓志氏（西宮市立郷土資料館学芸員）、櫻木潤氏（なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）、上杉彰紀氏（非常勤講師）に玉稿をいただきました。また、高橋隆博館長には平成 17 年度の購入資料についてご紹介をいただきました。ご執筆くださいました先生方に感謝申し上げます。

表紙写真は、ガンダーラ仏像頭部（パキスタン 紀元 3～4 世紀）です。肉けいは部分的に欠損していますが、波状の頭髪を束ねて口髭をたくわえ、目を半分閉じた表情の仏像頭部で、単独の礼拝像あるいは群像の中尊頭部とみなされています。